

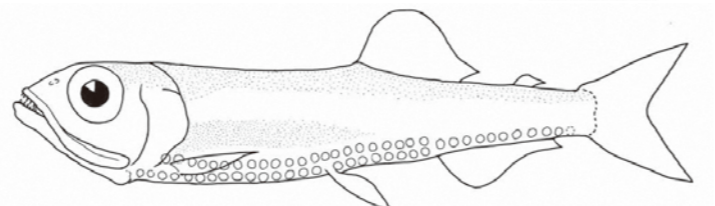
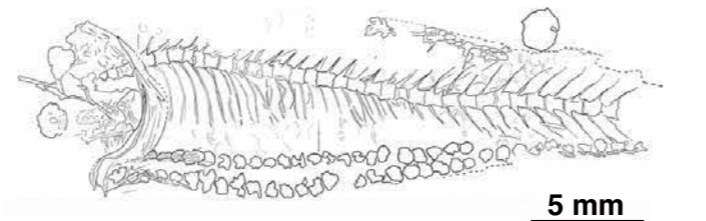
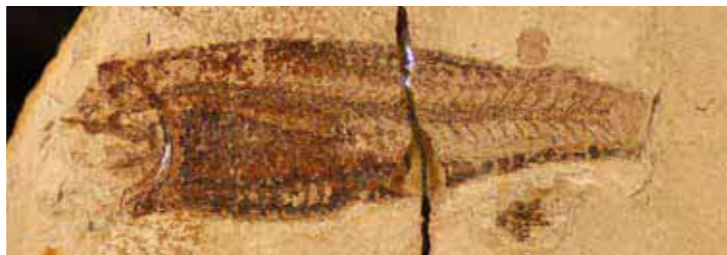
深海魚「シンジエンシス」が新種として認められました (島根県の魚化石としては新種認定第一号です)

シンジウキエスは今年(2024年)新種として発表(記載)された日本初のウキエソ属魚類の化石です。学名は *Vinciguerria shinjiensis*、学名の日本語読みはヴァインシグエリア・シンジエンシスです。ウキエソの仲間(属)はわずか数センチの深海魚で、体にたくさんの発光器があります。かれらは中深層(水深200~1000m)という海にすんでいて、昼間は200mよりも深いところに、夜になると水深50~500mの比較的浅いところまで上がってきます。

分類学的には硬骨魚綱ワニカゲギス目ギンハダカ科に属する魚です。ウキエソの仲間は同じワニカゲギス目のオニハダカの仲間とともに最も個体数の多い脊椎動物として知られています。世界に5種が生息しており、そのうち日本にはヤベウキエソ、ウキエソ、オキウキエソの3種がいます。ヤベウキエソは世界の温帯から熱帯の海に、ウキエソは熱帯太平洋西部以外の世界の温帯から熱帯の海に、オキウキエソはインド洋西部を除く世界の亜熱帯から熱帯の海に生息しています。

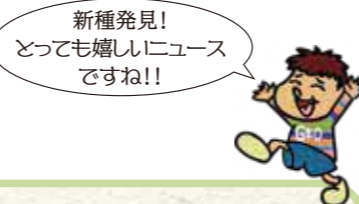
化石は4種が知られています。ジョージアの中期始新世のデスティンクタ (*V. distincta*)、コーカサス山脈とカルパティア山脈の前期漸新世のオプスクラ (*V. obscura*)、クリミア、コーカサス、カルパティア山脈の中新世のメルクリニ (*V. merklini*)、および韓国の中期中新世のオリエンタリス (*V. orientalis*) です。

シンジウキエスは臀鰭がより後方にあること、腹部の背骨が25個であるといった特徴のほか、これまで知られていない化石も含めたウキエソ属魚類とは発光器の数で異なります。



(上)シンジウキエソの化石
(中)化石のスケッチ
(下)シンジウキエソの復元図

やぶもと よしたか
藪本 美孝 北九州市立自然史・歴史博物館名誉館員



シンジウキエソの発見の経緯

この化石は1980年代に、宍道町佐倉から鏡に通じる峠の南にある小道横の崖から発見されました。中学校教員による理科教育の夏季研修会で訪れた時のものです。10人ほどの先生方が参加されていたなかでのできごとで、当然、この魚化石はなんだろうか、ということになりました。地質古生物学を専門にしている私としては、たぶんニシ科の魚だろうが、詳しいことは魚化石の専門家に聞いてみましょうというて、その場をスルーした次第です。そして、島根大学へ持ち帰って、2017年の退職間際まで保管したままだったのです。

山陰中央新報にこの化石が古生物学の国際誌に新種として記載されたことを報じてもらいましたが、早速、同紙の「こだま」覧に40年も前に発見されながら今になって種名が記載されたことが不思議だ、といった感想が読者から寄せられました。もし私が読者のような化石マニアだとすると、同様な感想を持ったに違いありません。それには1980年代中頃まで、魚化石だけでなく脊椎動物化石全般にある事情があったのです。

脊椎動物化石というと、恐竜化石のようにたいへん人気がありますので、研究者も多くいると思うかもしれませんが、しかし、野外での発見の機会のごく希なことではかありません。そのため、業績評価の研究環境下では対象になりにくく、当時の大学には魚化石を専門にしている人はいませんでした。また、当時は科学博物館も少なかったのです。そのようなことがあって、何十年の間、倉庫入りしていたわけです。

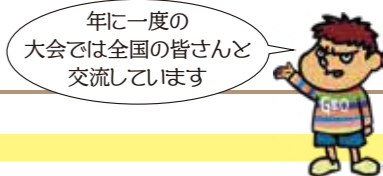


1980年代後半になると、全国的に科学博物館が設けられるようになり、脊椎動物化石を専門にされている学芸員も多くなりました。藪本先生は博物館に長く勤務され、国内の魚類化石を網羅的に研究されている第一人者です。ちょっと気になっていた魚化石、見ていただいて光輝きました。真っ暗な深海を光りながら泳いでいた深海魚だったとは…。皆さんも、1600万年前の来待大森の大地が深海であったことを想像してみてください。

このたびは、新種として認められた島根県の魚化石で第一号となったこと、そして宍道という地名を冠する種名(和名ではシンジウキエソという)に、地域の皆さんには嬉しいニュースになりました。

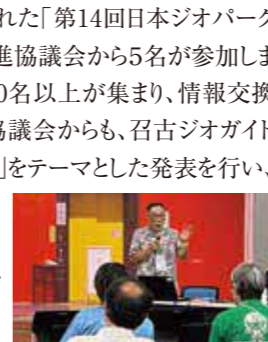
野村 律夫 島根大学名誉教授・ジオパーク専門員

ジオパーク推進協議会の活動



ジオパーク全国大会に参加しました

8月30日から9月1日に青森県で開催された「第14回日本ジオパーク全国大会 下北大会」に、本ジオパーク推進協議会から5名が参加しました。全国各地のジオパーク関係者の700名以上が集まり、情報交換や交流を深めました。本ジオパーク推進協議会からも、召古ジオガイドが「ジオパークが教えてくれる生物多様性」をテーマとした発表を行い、持続可能な社会を目指した自然や生物との共生について発表しました。若い世代もベテラン世代も、ともにジオパーク活動で盛り上げている成果が示され、たくさんの感動と刺激を受けた3日間でした。



召古ジオガイドの発表



開会式の様子



オープニングアトラクション

10月12日(土)に、美保関でジオトレッキングツアーを開催しました。



秋晴れのもと、小学生から大人まで15名の参加者が五本松公園入口を出発し、ゆったりとしたペースでトレッキングを開始しました。ガイドさんの楽しい解説を聞きながら、美保関の地形や歴史について学びました。参加されたみなさまは途中五本松公園からの景色を楽しんだり、済んだ空気や鳥のさえずりに癒されたりして、美保関の自然を満喫されている様子でした。下山後は美保関の旅館で昼食を堪能し、エネルギー補給。その後美保関灯台などを巡り、全員無事にツアーを終えることができました。参加者のみなさまの笑顔や美保関の自然の美しさに元気をもらった1日でした。「また参加したい」とのお声もいただき、今後も楽しい企画をお届けしたいと思います!

土佐清水ジオパーク紹介



—黒潮と共に生きる— 漁師が生まれる大地の物語

土佐清水ジオパークは、四国の南西部に位置する高知県土佐清水市全域がエリアとなっています。このエリアでは、盛り上がる大地に黒潮がぶつかって豊かな漁場や暖かな気候がもたらされます。お刺身で食べられるほど新鮮なブランド魚、「土佐の清水さば」、アコウや、ソテツなどの南国植物など、漁師町の人々の暮らしや亜熱帯の植物などが楽しめます。土佐清水の盛り上がる大地の成り立ちには、2つの重要な特徴があります。



土佐の清水さば(刺身)
土佐清水で水揚げされるゴマサバのことで、立縄漁法という独特の漁法で一匹、一匹大切に釣り上げられます。モチモチした歯ごたえのある食感で、地元ではこの食感を「ビリビリ」と表現します。

●電串海岸

電串海岸で見られる地層は、日本列島が大陸から分かれた1,700万年前に浅い海でたまったもので、地震、津波、海底地すべりの痕跡など当時の大地の変動をよく記録しています。また、岩石が潮風や波に洗われてきた風化構造などが、複雑な形の奇岩をつくっています。

●足摺岬のラバキビ花崗岩

足摺岬で見られる「ラバキビ花崗岩」は、地下深くで固まったマグマが大地の隆起によって地表に出てきたものです。ラバキビ花崗岩は、世界的には主に北欧などの5億年よりも古い大陸に存在し、日本のような新しくできた大地にはほほ見られない岩石です。



ラバキビ花崗岩

ラバキビとは、フィンランド語で「崩れやすい石」とのこと。こちらの花崗岩は、Aタイプ花崗岩に分類され、この種類は、日本では足摺岬だけで見られます。(解説は、日本地質学会HP 県の石 高知県)より



電串海岸

激しい波や風の風化浸食によって形作られた奇勝奇岩が楽しめます。